

牧師室から (2021.2.7)

何年前か、大阪にいる時に夏休みを利用してカンボジアへ行ったことがある。

韓国で共に教会生活をした人がカンボジアの宣教師で、プノンペン郊外を拠点にしてとても良い活動をしていることを聞いたからであった。その宣教師に会いたかったし、その働きを見たかった。その上、教会員がカンボジア王室の顧問として働いていることもあり、さらにカンボジアに親しみを感じ、観光も兼ねて行くこととした。私たち二人と親友の牧師一人、3人での出発だった。

成田からホーチミンを経由してプノンペンにやっと着くかと思ったら、気候不順で、しばらくプノンペンの上空を周回、着陸できずホーチミンに戻ってしまった。機内で1時間待たされ、飛行機の窓から夜空を眺めながらこれからどうなるのだろうという不安感に襲われていたが、飛行機が再びプノンペンへ向かい、やっと無事に着陸、ホテルに着くと予定の時間をはるかに越えていた。

最初のハプニングが物語っているように、日本では考えられない色々なことが起こり、忘れられないとても新鮮で楽しい思い出になった。貧しいが笑顔に溢れる人々の姿、美味しくて珍しいいろいろな果物、そしてアンコールワットという遺跡の不思議さには圧倒された。何よりも信号がない道路を奇妙に擦れ違って通る車とバイクの行列、リヤカーに自動タイヤをくっ付けたような乗り物トゥクトゥクが通る混雑した風景は日本では味合えない楽しさである。また、のんびりした人々の日常には、カンボジアの生活に慣れたら日本で社会復帰ができないと言われるぐらいにカンボジアの魅力に染まらせる何かがあるらしい。

カンボジアは続く内乱とポルポト政権の考えられない暴政で、多くの人が虐殺され、2016年の報告で人口の平均年齢が24歳という驚くほどの悲しい歴史を持っている国である。未だあっちこちに埋められている地雷があり、それによって手足を失った人や子どもの姿が珍しくないほど目につく。

そのようなところに、20年前に行った、その宣教師は身の危険まで感じながら、言葉も生活も慣れていない土地で、熱心に祈りながら働き、韓国の教会の惜しまないサポートもあって、今は300人以上の礼拝出席と幼稚園や小学校、中高校が建てられた。何よりも20か所以上のところに開拓伝道をし、設立された神学校で養成されたカンボジア人伝道者たちが活動をしている。貧しい人たちのために農場を作り、病院も建てられていた。

カンボジアの人々への愛と福音伝道への想いを熱く語っていたその宣教師の姿は昔と少しも変わっていない。海外宣教のビジョンを語り合いながら共に祈っていた若い日の記憶が蘇ると同時に、日本という恵まれている国で生きながらも何か失っている自分、そして伝道への情熱さえ冷めそうだった当時の自分の姿に気付かされ、恥ずかしくなったのを覚えている。

コロナが落ち着いて旅行ができるようになると、もう一度カンボジアに行ってみたい。失われている自分の何かを取り戻すためにも。

(鈴木善姫牧師)